

療法の意義

九州大学第2外科

桑野 博行, 園田 耕三, 大賀 丈史
住吉 康平, 北村 薫, 筒井 信一
藤也 寸志, 北村 昌之, 杉町 圭蔵

目的：術前温熱・化学・照射（HCR）療法の有用性を検討した。

対象および方法：1965年以後94年までに教室で切除した食道癌症例は650例であり、これらのうち HCR 療法を施行した152例と術前化学・照射（CR）療法を施行した125例および術前照射（R）療法群141例を比較検討した。

結果：5年生存率はHCR群で25.7%とR群18.4%、CR群の16.3%に比較して有意に良好であった。さらに、特に進行したstage IV症例においてHCR群の5年生存率は11.2%とCR群の5.9%と比較して有意に良好な予後が得られた。また、組織学的治療効果はHCR群においてGrade 3は33例(21.7%)、CR群12例(9.6%)、R群25例(17.7%)とHCR群において良好な組織学的効果を得られたものが多かった。

結語：食道癌、特にstage IVの進行した食道癌症例において術前温熱・化学・照射療法の有用性が示唆された。

I-J-5. 胸部食道癌に対する術前・術後治療の効果

富山医科薬科大学第2外科

清水 哲朗, 坂本 隆, 田内 克典
齊藤 素子, 笹原孝太郎, 岸本 浩史
齊藤 文良, 井原 祐治, 津沢 豊一
野村 直樹, 山下 巖, 黒木 嘉人
榊原 年宏, 齊藤 光和, 藤巻 雅夫

進行胸部食道癌に対する術前・術後治療の治療成績

を予後を中心に検討した。術前治療法別では生存率に差を認めなかった。原発巣の組織学的治療効果別では、Grade I, II, IIIの3群間に差を認めなかった。術前治療を行っても効果的にC0となった症例の予後は、C1以上症例に比し有意に不良で、非切除例および術前治療を施行しなかったC0症例との間に差を認めなかった。stage IV 65例では、術後治療法別の5年生存率は、それぞれ、照射＋、化療例で7.2%、化療単独例と非施行例とともに0%と照射＋化療群が有意に良好であった。

I-J-6. 食道癌に対する天理病院プロトコール

天理よろづ相談所病院・放

村上 昌雄, 黒田 康正
消化器内科 久須美房子, 羽白 清
腹部一般外科 松末 智, 武田 博士

1989年以降、切除可能食道癌に対して放射線(44Gy/44Fr/4W)と化学療法(CDDP-5FU)を先行させ、効果良好ならそのまま照射を続行(RT群:50-66Gy+RALS)、効果不良なら手術＋腹部IOR＋頸部術後照射(OP群)を行う集学的治療を行っている。対象は41例、c-stage I:10, II:16, III:12, IV:3例。

結果：44Gy時効果はGR15, PR23, NC 3例でRT群28例、OP群13例となった。I期(全例RT群):4生率100%, II期:6生率62%, III期:3生率19%, VI期:MST10か月であった。食道温存率は全例で58%、I・II期では81%であった。I・II期の再生率はRT群:24%、OP群20%で差はなかった。

考察：本治療法の到達目標は切除可能食道癌の治療率の向上と同時に食道温存率の向上をもめざす事である。